

第 87 回麻布獣医学会 一般演題 8

日本における犬混合ワクチン接種後副反応に関する 大規模な疫学調査

宮地 一樹¹, 木内 明男¹, 藤村 正人², 栗田 吾郎³, 阪口 雅弘¹

¹ 麻布大学 微生物学第一研究室, ² ふじむら動物病院, ³ 栗田動物病院

【序論】

我々は犬混合ワクチン中に高濃度ウシ血清アルブミン (BSA: 数 mg/dose) が混入していることを明らかにし, ウイルス培養用牛胎児血清 (FCS) 由来であることも以前に報告している。また, これまで日本において犬混合ワクチン接種後にアナフィラキシーが起こる症例が多くあることも報告してきた。しかし, 日本の犬におけるワクチン副反応の大規模な疫学調査はこれまでになかったため, 本研究において実施した。

【材料と方法】

日本小動物獣医師会協力のもと, 市中の動物病院を対象としたアンケート調査を実施した。母数のばらつきをなくすため, 各病院につき 100 頭分の情報を得た。アンケートには氏名や性別などの基本情報のほか, 副反応状況や接種ワクチンに関する情報も記載してもらった。アナフィラキシーを示した個体に関しては, 再アンケートを実施し, 発症時間や診断根拠に関する情報を得た。

【結果】

2006 年 4 月～2007 年 5 月に行われた 57,300 接種に関する情報が得られた。それによると 359 頭 (62.7/10,000 dogs) が混合ワクチン接種後, 何らかの

副反応を示したことが明らかとなった。359 頭の内, 41 頭 (7.2/10,000 dogs) がアナフィラキシー症状を示した。再回答のあった 31 頭 (回収率 75.6%) について, 27 頭 (87.1%) が虚脱, 24 頭 (77.4%) がチアノーゼを示し, 両症状を示したものは 22 頭 (71.0%) であった。アナフィラキシー症状は全て 60 分以内に発症しており, 約半数が 5 分以内に発症することが明らかとなった。

【考察】

本結果から, 日本では犬混合ワクチン接種後アナフィラキシーが高頻度で発生していることが明らかになり, 欧米と比較しても高い頻度である。この要因の一つとして, 小型犬中心の日本の飼育状況が関与していると考えられる。また, アナフィラキシーの約半数が 5 分以内に発症しており, 対処するためには事前準備の重要性が示唆された。本研究では, 1 例の死亡が確認されたが, 接種後 38 時間経過しており, ワクチンとの関連性は薄いと考えられる。今後は, より安全性の高いワクチン開発を行うため, 国際的な調査によりワクチン接種後副反応のリスクファクターを明らかにする必要がある。また, 継続的な調査により, 情報を常にアップデートしていく必要もあるだろう。